

小川未明『赤い蠟燭と人魚』研究

―捨子の動機を中心に―

大久保 みどり

序

一語は万語である。どのような一語も、それ自身で成立するのではなく、万語によって支えられ、意を深められている。それ故、作品の芸術性如何は一語を深める語数の量と質によって計られると言えよう。そういう一語の深まりが、他の一語一語との関連を生み出し、物語を展開させて行くのである。吉本隆明氏は『戦後史論』（大和書房、一九七八・一〇・三五）を書くにあたって、「一語と一語の関連性」から作品を鑑賞して行きたいと述べていた。大切な鑑賞方法であると思う。

『赤い蠟燭と人魚』は、小川未明の代表作の一つにあげられ、その独特な表現は今日まで多くの論議を呼んできた。最も大きな争点は、最後の町全体が減じる場面のようなものである。その原因が様々の論議を呼んでいる訳であるが、その多様さは、一語万語の関係を重視しないでなされた、研究結果のように思われる。そこで本論は、愛という一語に焦点をあて、未明が内在させた万語を深めつつ町全体が減んだ原因を究明する一步としたい。

この作品は、五部に分けて書かれているが内容からみると、起承転結という四部にきれいに分けられる。(起は、人

魚の世界 3 p ~ 6 p の 6 行目まで、(承)は、人間の世界 6 p 8 行 ~ 13 p まで、(転)は、人魚の娘が香具師に売られる場面 14 p ~ 17 p、(結)は、町全体が亡びる場面、18 p ~ 21 p という具合である。

以下に諸説と比較検討しながら見ていくが、今回は、(起)において、母親人魚が自分の子を捨てる、その動機を中心にしながら、愛を見て行くこととする。

I 外質的分析

人魚は、南の方の海にばかり、棲んでゐるものではありません。北の海にも、棲んでゐたのであります。

北方の海の色は、青うございました。……雲間から洩れた月の光がさびしく、波の上を照してゐました。どちらを見ても限らない、物凄い波がうねうねと動いてゐるのであります。(傍点筆者) (小川未明『赤い蠟燭と人魚』天佑社、大正10年5月、3 p。以下作品の引用文はページのみ記す。)

これを書き出しである。傍点「ばかり」「にも」の語から、一般に知られてはいないが、世には他にも「相通ずる生命」の存在と「相異なる生活」形体のあることを未明が気付かせようとしていることが解る。物語の冒頭の一語に、こういう目的で人物と場面設定を託したからには、当然、以後はその人物と生活の内容が明らかにされなければならない。

「北」「海」「青」「雲間」から「洩れた」「月の光」「どちらを見ても」「物凄い」「うねうね」「波」という語は、一語ずつ独立してみれば、明るくも暗くも読めるが、こう並べると、一種独得の、「寂しさ」「不毛」さをたたえて迫ってくる。「南」という語のもつ明るさとはうってかわった、想像もつかないような生活形体の中に棲む者が、いると

いう事実を誰も知らない。しかし、皆と同じような「生命」をもつものが、現に、何の希望も、将来も見出せないような生活の中で、様々に悩み、対決しながら幸福を得るために答えを見い出そうとしているのである。

なんといふ淋しい景色だろうと人魚は思ひました。自分達は……いろいろな動物等とくらべたら、どれ程人間の方に心も姿も似てゐるか知れない。夫れだのに……気の滅入りさうな海の中に暮らさなければならないといふのはどうしたことだろうと思ひました。長い年月の間……いつも明るい海の面を憶がれて、暮らして来たことを思ひますと、人魚はたまらなかつたのであります。(傍点筆者)(3p~4p)

似たような「心」と「姿」をもっている、「夫れだのに」自分はどうしてこの境遇に甘んじなければならないのか、一体「どうしたことだろう」と人魚は思う。このことばは、たんなる疑問ではなく、そんなことがあつてよい筈はない、という拒絶の意を、「夫れだのに」と呼応して強調している。その背後には、幸を得るのは当然の権利とする考えと、それを要求してもよいという信念がある。

この権利と信念があるにもかかわらず、人魚の母親は「長い年月の間」「いつも」「憶がれ」るばかりで、實際に行動し、幸福を手に入れることはなかつたのである。それは、もはや「たまらない」ことであつた。この極限に達した思いが引き金となつて、具体的な行動が開始される。

人間の住んでゐる町は、美しいといふことだ。人間は、魚よりもまた動物よりも人情があつてやさしいと聞いてゐる。(4p)

人間は、この世界の中で、一番やさしいものだといふことだ。そして可哀さうな者や頼りない者は決していぢめ

たり、苦しみたりすることはないと聞いてゐる。一旦手附けたなら、決して、其れを捨てないとも聞いてゐる。

(傍点筆者) (5 p)

どこでどう入取したのか、人間に関する情報は、段々に完全無欠性を有し、まるで愛の権化のような人間像になって来ている。「魚より」「獣より」「人情があつて、やさし」かったのが、ついには、「世界の中で一番やさし」というまでになり、更には、「決して」の繰り返しによって、その絶対性が強調されて来ている。その情報は単なる伝聞によるもので、まるで確証のないものではあったが、窮鳥懷に入る、母親人魚にとっては、最後に残された望みの場、生きる権利、生きていることの強調のために、何としても飛びこまねば、もはやどうにも「たまらない」懷であつた。そこしか道はないのである。「聞いている」「思った」ということばの繰り返しによって、母親が、自分の行動と思想に漸次、確信と正当性を与えようとしているのが伺える。

「世界一やさしい」というではないか、その上、人間と人魚、似ているところではない、「胴から上は、全部人間其のままなのである」その人魚とは似ても似つかぬ「魚や獣の世界でさえ、暮らされるところを見れば」、愛の権化のような人間が、「二度……手に取り上げて育ててくれたら、決して無慈悲に捨てることもあるまいと思はれる。」ならば何を躊躇し、恐れることがあろう。自分の長い生活経験から、海の生活には、もはや一縷の望みもない、ということを知り尽している母親としては、子の幸のために決断と実行をせずには居られない。

子供から別れて、獨りさびしく海の中に暮らすといふことは、この上もない悲しいことだけれど (5 p)

自分は、二たび我子の顔を見ることは出来ないが、(6 p)

母親にとって、これは死以上のものであろう。この悲愴な覚悟の背後には、子を思う愛が燃えていた。その炎が大きければ大きいほど「やさしい」で「あろう」筈の「人間」の「愛」に対する信頼と依存の念も大きかった。

遙か、彼方には、海岸の小高い山にある神社の燈火がちら／＼と波間に見えてゐました。ある夜、女の人魚は、子供を産み落すために冷たい暗い波の間を泳いで、陸の方に向かって近づいて來ました。(6p)

起の部はこの文章で終っている。絶望の深淵にやっとみつけた救いの光、それをしっかりとつかまえたものは、生に対する欲求への権利と信念にうらうちされた子を思う愛と、一人決めとは言え人間の「愛」に対する信頼と依存であった。「熱い」愛と「明るい」希望に身体を火照らせながら、「冷い」「暗い」絶望の波間を泳いで行く人魚の姿は、「うねうね」とした荒海の中をひたすらに生きることと、救いを求めて揺れ動き、進んで行く小船のようである。その願いを知ってか知らずか、遙か、彼方の小高い山に神社の燈がちらちらと見えている。

人間の世界はここぞ、幸福はここぞと、あたかも導き、招く燈台のように思えたであろうか。しかし保証はない。辿りつく先はどんな所だろう。本当に幸福のある所だろうか。あの燈火は一体誰が何のためにつけたのだろうか。入り乱れる疑問や不安、期待を孕ませたまま物語は(承)へと移って行く。

この(起)の部は、多く未明を否定する際の対象にもつかわれた。その一つに昭和三十五年石井桃子、いぬいとみこ、瀬田貞二、渡辺茂男らによって書かれた『子どもと文学』がある。

最初の部分を見ると、舞台装置になっている「ものすごい」ふんい気だけはわかりますが、(中略) 人間の世界をなせこの人魚が「きいて知って」いるのか、人魚のくらい、さびしい暮らしというのがどのようなものなの

か、そうしたことが不確かにしかわからず、ただ、さびしい、暗い気分だけが、くりかえし述べられているだけなので、読者はさきへすすむことができず、いらいらさせられます。(石井桃子他『子どもと文学』福音館、昭42・5・1・6p)

このグループの否定論は、よかれあしかれ「かなり流布し、児童文学に関心を持つ諸者につよい影響を及ぼ」した。表現が「子どもの具体的な空想力や子どもらしい感受性に導かれて、ともに空想の世界にわけ入ろうとしない」と言う。しかし、この作品の(起)部で最も読者が得なければならない感動は、いみじくも彼らが体得した「物凄いふんい気」「疑問」「不確さ」「寂しさ」「暗さ」である。未明の目的は、皮肉にも反对者を通して達成し得たことが証明されたと言えようか。

これと同じ部分が古田足日氏によっても否定の材料につかわれている。まず、氏は未明が「原始的感覺」の持ち主だから、「原始的なことばの使い方」をしていると規定する。

「赤いろうそくと人魚」の書き出しが、この文章のなかのもっとも重要な語句は「北方の海」である。この北方の海はぼくたちの日常のことばの中で使われる「北方の海」ではない。ぼくたちは地理的な意味で「北方」ということばを使うが、この文章のなかの「北方」はその一般的な用法のなかの一属性——暗くさびしく孤独であるという属性を強調し、それを強調することによって、暗くさびしく孤独な環境一般を象徴しているのである。ここでは「北方」は「海」を限定することばではない。逆に、その日常的な意味を離れて、無限定な広がりを見せている。そして、海も波も人魚に対して、敵意を持つもののように書かれているのである。

氏によれば、「原始心性」⁽⁶⁾とは、「社会を生命の連続とみるいわば肉体的感覚であって、愛と正義、善意とか……表面的主張は、この埋もれた感覚との自覚的つながりは持っていない」が、存在するすべてのものはその無自覚の部分では常に「調和」を求める世界であるとしている。それ故当然、「北の海」は単なる地理的な北方をさすのではなく、人魚と連続した生命を持ち、かつ調和の方向へと働きかけているのだから、「人魚に対して敵意を持つもののように書かれている」とする。自然も独自の生命をもって働きかけるという訳である。しかし、それでは、「人魚は、南方の海にばかり」ではなく「北の海にも」棲んでいると、冒頭で異なる存在と異なる生活のあることを読者に気付かせ、訴えようとした一文が、骨抜きにされてしまう。「北の海」は「暗く寂しい孤独な環境一般を象徴している」という意見に異存はないが、その海が「生命」をもって、働きかけているというのは飛躍であろう。氏は冒頭の一文を素通りしている。「北の海」は異なる生活の場のあることを描写したものである。

更に氏は、「人魚」の存在をも否定する。

人魚のすがたとあらしとは、もともと異質のものである。前者は外部世界の反映であり、後者は未明の心象である。この異質のものが統合される場は、後者の場、未明の心の中である。人魚をめぐって起る事件は、人魚、その娘を初めとして、まったく架空の事件である。人魚そのものには意味はなく、人魚の背後の事象にこそ意味がある。そして、その事象は、農村にも、都会にも、小市民にも、労働者にも共通する事象である。あらゆる個性はすてられ、共通性だけが取り出されたのであった。つまり、形象化されたものは、事象そのものではなく、事象に共通の要素である。(古田足日『現代児童文学論』くろしお出版一九六六・一・55p)

確かに、「事象そのものではなく、事象に共通の要素」に意味があるし、それが形象化されてはいるのだが、それ

故にこそ「人魚」そのものに意味がなければならない。なにより未明自身が述懐している通りである。

海豹や、鯨を題にして童話を書いたこともあります。何といっても、喜怒哀楽をよく解すと言い伝えられた人魚を想像するたび、私は、一層の親しみを人魚に覚えたのであります。すべての万有には、相通ずる生命があって、ただに現実、非現実の別だけでなく、未知の相異なる生活を結びつけるのも、やはり愛の力であろうと思いました。

この素朴な信念があればこそ永遠的な希望が生れ、不思議な勇気がわくのでありましょう。また正義は人間だけでなく、感情を解する限り、たとえ動物にあっても存しなければならぬのであります。(岡上鈴江『父小川未明』新評論版一九七〇・五・200p)

「万有には相通ずる生命」がある、その通じ合える生命をもつものなら、非現実、現実を問わず、「愛の力」によって、必ず一つに結びあえる。そういう「素朴な信念」があつて、はじめて生きる「希望」や「勇気」を持つことが出来る。しかもそこには「正義」が存しなければならぬ。

「愛」と「正義」に生きること、それがすべて「感情を解する」ものの生き方である。それをテーマに置いてこの作品を書いたと未明は言うのである。

人魚が登場する物語は、確かに、一見「架空の事件」のようではあるが、テーマが愛と正義によって、「異なる生活を結びつける」という点にあるなら、明らかに「人間」とは「異なる生活」をするものが登場しなければならない。「背後の事象」に意味があるのではなくて、人間と「心」も「姿」も似ており、かつ通じあえる心を持つ「異なる存在」、という点において「人魚」そのものに意味があるのである。

これなれば、冒頭の一文が鮮かに息吹きかえしてくる。「異なる生活」「異なる存在」性をもつ人魚なれど、人間と相通ずる生命を持つてゐるではないか、もはや「心」も「姿」も「似ず」「通じ合わない」「魚」や「動物」の世界に留まらねばならない理由は一つもなく、むしろ留まることは、わが子に死の生活を強要することであつて、それは「愛」のないことである。それでは母親自身の人間性（＝人魚性）が無に帰してしまふし、未明の思想にも反する。「愛さえあれば」、この母親に「愛さえ」持たせれば、物語は展開して行けるのである。それ故未明は死にも等しい悲しみを、自分の人生に賭しても、わが子の幸を願うという愛を母親に与えた。と同時に、人魚からすれば「相通ずる生命」をもつ、異なる生活の異存在なる「人間」もそれを有していなければならぬ。しかし確証はない、そこで母親をして、考え、想像をふくらませつつ確信させて行つた人間の姿は、「美しい町」に象徴される豊かな生活と、愛の権化ともいえるものであつた。

ここには未明の思想も伺える。一つには、「南」の「海にばかり」「北の海にも」ということばから、生きとし生けるもの生れて来た限り、様々に考え、悩み、生活と対決していく、その中で「幸」を求めるのは当然である。というものと、二つには、「夫れだのに」「どうしたことだろう」ということばから、似た「心」と「姿」をもつ限りは、皆「平等」である。それ故、当然互いにその幸を分かちあわなければならぬ。というものと、それを成立させるには人間としてどうしても「愛」がなければならぬ、という三つである。

古田氏は、未明は、万有が「連続」した生命を持つという「原始心性」を有していると規定して、否定したが、それは勢い、未明のこの三つの思想をも否定することになってしまう。なぜなら、確かに未明は、「万有には相通ずる生命がある。」と言っているが、未明の言う「通ずる」には古田氏のいう「連続」という意はなく、各々の存在は「独立」したものであつて、一方の勝手な「呪文」や「呪術」によつて、知らない間にその生命が変化させられるような「連続」性は有していない。各々が、明確な意志と理解を持つて対峙し「通じ」合い関わり合つてゐるのである。

なのに「原始心性」という、すべてに「連続」する生命を説くなら、個と社会の発展と幸福は「異なる存在」の「異なる生活」をもつ「心通わせる」者同志が、互いに愛をもつ時、はじめて、成立するという思想は成り立たないからである。古田氏は、自ら立てたこの「原始心性」という観点から、未明には思想が確立されていないという。

生の連続の世界は調和の世界にはかならない。生活童話の日常的調和の根元は原始性である。しかし、この感覚は、思想としては確立されない。行雲流水ということばに現われる東思洋想として、未明童話のうちにや明確なまとまりがあるに過ぎない。(9 p)

しかし、「原始心性」等ではない故にこそ、未明は冒頭において、異なる生活の異なる存在（＝独立した存在とも言えよう。）を明確にうち出して来たのである。その中には良かれ悪しかれ確立した彼独自の思想が内在されている。

社会生活と個人生活とは、本来ならば一であって二ではないのです。何故ならば、社会は個人の意志、本能の表現であって、別に外に在って存在するものでないからであります。

吾人が今日の社会に於て求むる理想は、吾人がよりよく、より幸福に、より、自由に生きることよりないのです。言ひ換へれば、自我の発展をより可能ならしむる以外にはないのです。愛と言ひ、自性と言ふも、畢竟この社会がある威嚇を以て個人に迫る如き一種の偶像でなくして、實に人間性其のものゝ現われである。即ち美と愛との表現であらしめんが爲の希望に他ならぬのです。(小川未明『生活の火』「藝術の蘇生時代」大正11年6～7 p)

ここには、人魚の「連続」ではない「独立」した存在性と、彼女が「自由」と「幸福」を求めて邁進することの正

統性を認める思想がある。

現實はどうともすることの出来ない客観的の實在であると同時に、また極めて主観的な實在である。我々が懷く凡ゆる感情、例へば怒り、憎しみ、または愛にもせよ、凡ての感激、冒險といったやうなものは、人生及び自然から生起してくる刺激である。この人生及び自然の存在を描いて、現實はない筈である。それであるから現實に徹することは、自己の生活に徹するに外ならないのである。……現實主義は言ひ換へれば人間主義である……本當の意味に於ける人間生活の歴史は、平和にしろ、革命にしろ、みな現實主義に立脚している。我々は未だ會て現實に立脚しない仕事の成功した例を聞かない。例えば如何なる運動でも如何なる主義でも。……信念の在る處、信仰の存する處、悉くこれ現實に立脚していると言へよう。どんな破壊的な行爲でも、またどんなに平凡に見える行爲でも、それに信仰と信念とがあつて、十分な自覺の上に起つてゐるさへするものであつたなら、それは立派な人間性の現はれでありまた現實性を持ったものであると言つて差支へない。『生活の火』「囚はれたる現文壇」10 p ~ 11 p)

ここには嚴しい「北の海」の現實と戦う母親の姿とその「信念」を肯定する思想がある。

然し私は、社會改造の事實は各人の信念にその根底を置くものだと考へてゐる。さうして此の信念を民衆の頭に植ゑつけるのは眞の民衆藝術家の爲すべき務めであると考へてゐる。獨り永久に人間性の爲めに戦はなければならぬのは、藝術家の義務である。(15 p)

ここには、そういう思想を『赤い蠟燭と人魚』の中に作品化しようとする未明の芸術態度——方法がある。

猪熊葉子氏は、「日本近代の児童文学の特質を説明する」にあたって、文学には「認識者」と「求道者」の生み出したものがあり、未明は、「実践的な求道者」⁽⁷⁾としての立場をとったとしている。何をどのように「認識」していたかは、後に問うとしても、確に未明は自ら立てた思想を「実践」しようとしており、母親人魚にそれを託していると言えよう。島山兆子氏は、『赤い蠟燭と人魚』の冒頭を評するに際して、まず、未明が、「見る者の内面を一致した自然描写」法をとっている故に、「冒頭は、母親人魚の思いを反映して暗く淋しい北海の描写で始」めたとしている。もしそうなれば、母親の心が暗いから「北の海」が「暗く淋し」く見えたのであって、実際は、明るく楽しい所であったかもしれないという可能性を秘めてくる。とすれば、「北海」脱出は、母親個人の自在な心象によって左右されるものであり、どうしても「異なる生活と存在」の中に入って行かなければならないという必然性はなくなってくる。母親人魚の心のままに社会の運命は決定されて行くことになる。ということになれば、物語の展開は、母親の心の善・悪の量によって、展開されることになるから、悪の方をとれば、結末は母親の改心か、あるいはそのままの破綻で終ることが予想される。氏は後者の立場をとっているが、それを次のように証言している。

ところで、母親人魚の「憧れ」は、筋の展開によって「裏切」に会うよう構成されているわけであるが、このことは、「赤い蠟燭と人魚」が、二重の構造をもっていることをも示している。それは、物語が展開する人間社会の筋の構成と、それに伴って変化する母親人魚の心理による構成である。これら二つの世界が、関連しながら平行して進行するところに、この作品の構成上の特色が指摘できる。(50 p)

と。更に氏はこの立論に従って、「母親人魚の心理による構成」と「人間社会の筋の構成」の二つが関連しあう所

にこの作品には構成上の特色が見出されると言う。

この論も、冒頭の一文が読み過ぎた結果と言えよう。母親の心によって筋は展開してはいない。「母親人魚の「憧れ」は、筋の展開によって「裏切り」に会うよう」わざわざ構成された結果ではない。「憧れ」はしたが、それは、母親一人の気まぐれによるものではなく、個人的な心情を吐露したものでもない。「淋しい」と感じた背後には、「長い年月の間」の、現実生活との戦いがあった。それは「思う」だけでも「たまらない」ほどのものであり、そうとは思えない必然の「淋しさ」である。そういう基盤に立つ「憧れ」であって、冒頭の一語故に導き出され展開されて来たものである。必然的なものである。それはもはや個人的なものではなく、「現実生活」の中で戦って来た者凡てが、あがずにはいられない「幸」への欲求と権利を主張するものであった。普遍性をおびているのである。「異なる生活」「異なる存在」のあることを冒頭において喚起させようとした未明の創作意識と思想を、読み過ぎはなまるまい。

「社会は、個人の意志と本能の表現」したものである故に、「個」と「社会」との在るべき姿を示すのが「芸術」の使命とした未明にとって、「北の海」に「淋しく」座して「憧れ」ている母親には、どうしても、独立した個としての自発性と、普遍的な意とを与えねばならなかったのである。この母親は、そういう未明の思想を負うて、現実生活の中で心一杯にして「憧れ」ているのである。母親の苦しい思いが反映している故に、自然が暗く淋しく見えたのではなくて、苦しい現実生活との戦いがあったから淋しく見えたのである。未明は「自分の見た自然を偽りなく描く」ということは、作家にとって意義のあることである。」⁽¹⁰⁾と言って「主観的心情表現」なるものを主張してはいるが、それは、元来もっていた自分の感情をぶっつけていくという方法ではなくて、現実**に**ぶつかって行った結果、湧き出て来たその心情のままに表現するという方法である。それは「草木の暗示から」⁽¹¹⁾「現実生活の詩的調和」⁽¹²⁾「田舎と人間」等の諸論にもうたわれている。

以上から、この

物語は、母親人魚の「捨子」の行為で展開しはじめる（50 p）

のではなく、「個」と「社会」の関わり方を見つめるために、異なる生活と存在のあることを認識することからはじまっているのである。それが、この物語を展開にいたらしめる動機であり、捨子の動機につながるものである。一語一語の関連性と緻密さを見て行く時、自然に作者の意図したテーマと作者自身の思想が浮かびあがってくる。それに従って物語は展開して行っている。一語、一文といえど読み落すことは、恐ろしい気がする。

Ⅱ 内質的分析

では、未明が、「個」と「社会」、各々の独立と調和的發展のために必要とした「愛」は、一体内質的には、どういう性質を有していたものであろうか、それをアンデルセンの『人魚姫』と比較しながら見て行きたい。両者の「愛」という一語を成立させることばの質量の差は、同じ題材と構成を持ちながら、右と左にはっきり区別される作品を生み出した。この二人は、洋の東西にあって、児童文学史上大きな役割を果たしているが、その評価を受ける際、良きにつけ悪しきにつけ、論議的的になっているのが、『赤い蠟燭と人魚』『人魚姫』の二作品である。この二作品を比較検討することは一語の中の方語をさぐるに最適の手段ではないかと思われる。以下に見る。

アンデルセンの『人魚姫』も、『赤い蠟燭と人魚』と同じように、冒頭は、海の描写からはじまる。しかしこの場合、「異なる生活」をする「異なる存在」のあることを、気付かそうとする意図はない。

海をはるか沖へ出ますと、水は一番美しいヤグルマソウの花びらのように青く……このような深い海の底に、人魚たちは住んでいるのです。(『アンデルセン童話集』(一)・大畑末吉訳・岩波書店・昭和48年5月30日・111p。)

「このような」という語の中に、人魚たちの住んでいる世界が、どういう所か、その内容を強調しようとしているのが伺える。それ故以下およそ四百字詰原稿用紙にして、五、六枚にわたって集中的に、後は全体を通じて実に具体的に、リアルに描写がなされる。それは、いぬいとみこ他五氏をして、「非現実の世界をリアリティをもって読者にうったえる」と称讃せしめ、未明否定の一因とせしめたほどである。アンデルセンは、特に、こういう描写に秀でた作家ではあるが、他の作品では、これほどまでに緻密な描写をしていないところを見ると、ここでは入念に記すことを通して何かをねらっていることに気付かされる。

「このような」という冒頭の一語に導かれて素晴らしくリアルに繰り広げられる人魚の世界は、人魚姫が「永遠の生命」を得るためには、どうしても「捨て」なければならぬ。「泡の生命」を説明するものである。それが入念であればある程、一体どういう動機で捨てようとするのか、それ程までにして得たい「永遠の生命」とはどんなものだろう、という疑問が素直に湧きあがってくる。

アンデルセンはこの「動機」と「永遠の生命」を大きく浮かびあがらせ、その存在意義に注目させることをねらっているようである。いぬいとみこ他五氏の評価は、この点を見過している。単にアンデルセンが表現のうまさ故に、未明がそうでない故に、二作品の差が出来たのではなく、アンデルセンはテーマ故に、最も具体的に、リアルに書かねばならぬ必要性を持っていた。未明も又、テーマ故に書く必要を持たなかったのである。猪熊氏は、『日本児童文学』(はるぶ・昭和49年1月号、《討論》「小川未明をめぐって」26p)で、「要するに未明物語の表面には、『子ども

と文学』の方が批判なさったように、納得のいかないところ、空想世界の飛躍はたくさんあるのよね。でも私は、その論理のない、ということが「認識者」未明の表現としては必要だったというふうに私はとらえているわけです。」と言っている。しかし、未明にとってはテーマ故に書いてはならないのであり、また自ら立てた思想から言って、どうしても書くことが出来なかったのである。

では一体「泡の生命」とはどういうものなのか、

海をはるか沖へ出ますと、水は一番美しいヤグルマソウの花びらのように青く……このような深い海の底に、人魚たちは住んでいるのです。……人魚の王様のお城が建っています……お年寄りのお母様が……とりわけ、お孫さんの小さい姫たちを、だいじにすることは、たいしたものでした。……一日中。みんなは海の底の広々とした部屋で遊び暮らしました……この末の姫はもの静かな、考え深い、すこしかわった娘でした……わけても末の姫は、一番きれいでした。……陸の上ではとてもみられないはなやかなものでした。……こんなきれいな声は、地上の人間は持っていません。(『アンデルセン童話集』(一)大畑末吉訳・岩波書店・昭和48年5月30日・119p。以下ページ数のみ記す。)

地位・名譽・財・容貌・人品・愛顧等々、手に入らないものは一つもない。しかも質量において窮みに達している。おまけにそれを得るために何の労苦も必要とされてない。それに比せば人魚の母親が憧れたユートピアともいうべき人間の世界は貧弱で殺風景でさえある。むしろ母親にとっては予想も、望みもしないほどのものである。これを猪熊氏は、「非常(15)に素朴で、反文明的」で「貧弱」なユートピア観であるが、しかし、その貧弱さの背後には、「逆ユート(16)ピア」でも名づけられるもの」が「作り出」されていると評価している。それは、

人間の利己心・嘘・怠惰などを素材にし……人間の持つ悪しき部分に光をあて……人間が良心によって築こうとする理想社会の建設をはばむ悪しき要素の実体を認識させ、それを反省、克服させる（84 p）

ようなものであるとしている。確かに未明は、氏のいうような考えを持っていた。しかしそれは、「ユートピア」建設の手段であって「逆ユートピア」そのものの実体を言っているのではない。むしろ未明は「ユートピア」以前の段階に留まっているようである。更に氏は、未明の「貧弱」なユートピア観の原因として、「未明の主観的・情緒的・性急な資質」を掲げている。勿論それに負うことは必定であるが問われるべきは、その上に成り立った思想如何であらう。

田舎に行っても、其處に有産者と無産者の生活の差別がある。けれど、其れは都会程にけばけしいことがないから、まだ田舎を憧れる人々がある。しかし、其處にも永住は堪へられない私達はついに牧歌にも慰されない。かくして、昔を思慕する心が起るのです。少なくとも、昔に於ては、かうして階級闘争は見られなかった。當時は、無智ではあったけれども、今から見れば取り返されない、美德があった。

しかし私は考へる。益々文明になる方がいい。そして、ますます其處に人間生活の不平等が實現された方がいい。眞理はどうせ行く處に達しなければ止まない。其時、新文化は創生されるのだ。理想の市街は都會から創まると言った。ゾンバルトの言葉には、蓋し深い意味があります。（小川未明『生活の火』『社會と林』生華書院刊 大正10・3）

未明は、終始平等な物質分配を説いたが、それが容易に實現し難いものであることをも承知していた。しかし、

「個」と「社会」各々の独立性と調和性を求めて、「現実生活」を真実に生き抜くしかない、そうしていればやがて、その切磋琢磨の中から「新文化」が自然に「創造」されてくるであろう。これが、当時の未明のユートピア観だった。「草木の暗示から」という論稿の中でも、同じことを主張している。

私は、人間の生活が人間らしく正直に営まれた時に、長い間忘れられてゐた人間性が取り返されたと信ずるものです。そして、理性がつひに戦ひに打勝ったと信ずるものです。其時からの文明こそ本當の輝きある文明であつて、其の後に来る、進歩した人間の生活がやがてまた望まれるのでありませう。

良心を失つた、社会は、いくら努力しても目的には達しない。智識も、また何の役にも立たないばかりか、反對に、ますます生活を虚偽、暗黒に陥らしむるばかりである。みんなの頭に、何が正しいか、何が善であるかといふことが分らないままでは、社会は、ますます墮落するであります。そして、人間のすべてが曾ては持つてゐた人間性を取り返すまでは決して容易の努力ではないと信ずるのであります。(177p)

未明にとって、ユートピアは、この不平等の世界が終らないかぎり、具体的には解り得ないものだったのである。ユートピア観の弱さは「主観的・情緒的・性急な資質」に起因するというよりも、現実の様々な不条理を前にして立ち立てた、未明の思想そのものに起因しているといえよう。神宮輝夫氏は、「宗教の点だけを例にとつたが、思想・美意識その他、未明は、ひじょうに多くのものを豊かにもちながら、それらを融合統一できなかったのではないだろうか。すくなくとも彼は、分析と総合の能力に欠けていたように思う。だから、ときどき、彼の作品は、テーマがよろけていて、はっきりとつかめない。」(『童話への招待』日本放送出版協会・昭45・10・25・164p)と評しているが、確かにそう言える。しかし未明にとっては、何宗でも、何主義でもよかったのである。現実に立脚していて、それが

真実でさえあれば、それ故、表現において一貫性がなく、混沌さを感じさせたり、「認識者」的側面を見せたりするが、是非は別としても、それらは彼独自の分析と総合によってうちたてられた結果なのである。未明は、この思想に立脚している限り、やがてユートピアに行きつけるという確証もその存在性も不明瞭にしかもつことは出来ないし、又めざすべきユートピアの世界は現実の世界と大差を置くことは出来ない筈である。それ故、人魚の母親が捨子をしてまで入りたいと願ったユートピアともいうべき人間の世界も、当然「北の海」と大差のない所であることが推察される。

しかし、アンデルセンは二つの世界をはっきり区別しており、彼にとつてユートピアとも言うべき「永遠の生命」は「泡の生命」をもつ人魚には「決して見ることで出来ない」けれども厳然としてそこに存在しているものとして描かれている。それ故具体的な描写はされていないが「泡の生命」の描写がリアルで、具体的であればある程、目に見えないはずの「永遠の世界」は一層のリアルさをもって迫ってくる。

確かにある。そして、この世の何ものとも比肩すべくもない、もっと素晴らしいもの、だけども見ることの出来ない世界、これだけ条件がそろえば、「憧れ」ずには居られない必然性が生じてくる。しかし、アンデルセンは、ここでワンクッションを置く。人魚姫をしてすぐその世界へと、飛びつかせはしないのである。

「そんなことを考えるもんじゃありません。」と、お年寄りは言ひました。「わたしたちは、あの上の世界の間よりも、ずっと仕合わせなんですよ。」(p 136)

海の魔女は言ひました。「ばかなことはしないがいいよ。わがままをとおすのもいいが、そのために不仕合わせになるよ。」(140 p)

「上の世界」についてよく知っているおばあさんも、魔女も一笑に付すほど、馬鹿げたこととして止めるし、なにより、同じ人間の世界を垣間見る体験をした五人の姉達は「ひと目もたちますと、海の底がやはり一番美しく、住みよいなつかしいところだと、言うようになる」(126 p) 始末である。他の誰もが脱出したがらないほどの、美の極みの世界、よほどの動機がなくては、出て行く必然性はなくなってしまう。そこで、アンデルセンは、人魚姫に王子に対する愛を持たせた。これがワンクッションである。人魚の母親なら、断じて、この世界から出て行こう等という気を起さないであろう。母親の動機も娘への愛から生れたものではあったが、それは、現実生活を真実に生き抜いている者なら当然持っている筈という未明の思想から生み出されたものであった。それ故その愛には、微塵の卑下する所もない。後は相手に愛があることを待つだけである。相手に愛さえあれば、平和な社会は成立する。それ故母親は昂然と愛の権化のような人間像をつくりあげてしまう。「……と言うことだ」「……と聞いている」「……と思った」と、伝聞と推測による相手の人間像は、決しておぼろなものではなく、脆くあやふやなものでもなく、

現状を憂える中間層の常として、人魚の母親は、上位段階に属する人間と人魚の類似性を挙げずにはいられない。違いを認識しようとせずに、類似性へののみ目を向けようとする思考には、主体性はなく足場を失う危険性が孕まれている。(『国語教育学研究誌』第2号、小川未明「赤い蠟燭と人魚」の研究、畠山兆子、大阪教育大学国語研究室、44 p、一九七七)

ということもない。ユートピアに住む人間としては当然手にしていなければならない切符であった。中間層のひがみから類似性に目を向けたのではない、心を交わせる相手としての条件を満たすために類似性を言ったのである。

しかし、この愛の背後には、自分の愛は確立されているという自負心と相手も同じ愛を持つべきだという強制があ

る。自分はすでに子の為には不幸をいともぬ程の愛を持っている。それ故後は相手さえ、愛を持っていれば、どんな苦しい状況であつてもかまわないのである。「暮らされないことはないだろう」(4 p)「暮らされないことはない」(5 p)とたたみ掛けて行く様は、未明の提示した愛が、この二つの欠陥を持っていたことを証明している。

アンデルセンの方は、そうではない。今住んでいる現実の世界は愛と人情と尊敬が充滿し、「個」と「社会」が調和と自由を謳歌している世界だった。しかしその愛も、人間性も、自由も、やがては泡と歸して何の痕跡も残さない。有限なものである。人魚姫はどうしても「この泡の生命」から抜け出たかった。生きる為に、生命を賭して行く両者ではあるが、アンデルセンの方はもろに、人間として永遠性を有する程の生命とは如何なるものであるか、その本質にさかのぼっている。有限な、地位、名譽、財、愛顧、人情、自由、調和等、有限な世界に立脚して成立した一切を超越したところに存在するもの、そういう存在論に基を置いている。

いかに富み榮、睦み合つていようと、永遠の前には死も同然、今だ確かな存在を得ていないものとしての自覚がここにはある。それ故自分の愛に対する自負心は微塵もない。そうは言つても、人魚の母親に決して負けないだけの愛は実践していた。それは難波した王子を助けるために、「海の上に漂っている材木や板ぎれの間をかきわけて泳いで行きました。もしその一つにでもぶつかったら、からだが押しつぶされてしまうことも、すっかり忘れ」(130 p)ほどの愛である。

私は「この上もなく悲しいけれど」(5 p)と自分を振り返える余裕のある母親に比せば、余程純粹性を有している。それでも尚、永遠の前には、有限とみなしている。

未明はひたすらに戦う。戦っていれば、その内最高の世界が開けて来るだろう。あてなく確信なく果てしない戦いである。しかし、アンデルセンは言う。永遠性を得るためには、有限なものを完全に捨て、その後はじめて永遠なる神の生命にあつて一つに結び合うことだと。

それは、永遠の世界に入るたった一つの手段を教えたおばあさんのことばの中にあらわされている。

「けれどもただ一つ、こういうことがあるんだよ。人間のうちのだけれが、おまえを心から愛して、両親よりもおまえの方をいとしく思うならば、そしてまごころと愛情とをすっかりおまえにそいで、やがて、神父さんにお願ひして、その人の右手をお前の右手におきながら、この世でもあの世へ行っても、いつまでも変らないまごころと誓いとを立てさせてくださるならば、その時こそ、その人の魂がおまえのからだにのりうつって、おまえも人間の幸福にあずかることができるんだそうだよ。つまり、その人はおまえに、魂をわけながら、自分の魂はそのまゝ持っているというわけだね。けれども、そんなことは起こりようがないよ。なぜって、この海の底では美しいとされている、おまえのその魚の尻尾だって、陸の上では、みにくいものと思われているんだからね。人間にはその使いみちがわからないんだね。それで、二本のぶかっこうな、突っかい棒なんか持って、それをお上品ぶって、脚なんてよんでいるんですよ。」

人魚姫はため息をついて、悲しそうに自分の魚の尻尾をじっとながめました。

海の底では、美しくても、人間の世界ではみにくいと思われている尻尾をもつ人魚、その姿には、何一つとして共通の要素を持たない断絶した姿が象徴されている。人魚の母親が「心」も「姿」も似ていてではないか、と脱出する際の一つの起因としたものを人魚姫は持たない。「心」も「姿」もまるで違うのである。「ため息をついて悲しそうに自分の魚の尻尾をながめる」「人魚姫」の姿にはなんとかして現実のこの「心」も「姿」も変えたいという願ひが秘められているようである。人魚の姿のままで人間界にのり込んで行く母親と、恐ろしい戦の末、「心」も「姿」もすべて、人間の姿で人間の彼岸に立つ人魚姫の姿には「永遠の生命」の前に対峙するものと否との差が、明確に示され

ている。

人間とは「心」も「姿」も違うものなればどれ程「心」を尽して愛したところで所詮成立しよう筈もない。それが成立出来るのは、王子の方から愛を誓ってくれ、神の仲立ちを得て魂を注いであつた時だけである。どれ程人魚が愛し抜いても、相手が注いでくれなければ決して得られない。しかも

「だが、ことわっておくがね、」と魔女は言ひつづけました。「いったんおまえさんが人間の姿になったら、もう二度と人魚にはなれないんだよ。二度と水の中をぐぐって、姉さんたちや、お父さんのお城へは、帰ってこれないんだよ。また、王子が、両親を忘れてしまうほど、おまえさんが好きになって、心の底からおまえさんのこりばかり思ふようにならなけりや、そして、坊さんがきて、おまえさんたち二人の手を握らせて、夫婦約束をするようにならなけりや、不死の魂なんでもものは、決してさずかりっこないんだよ。もし、王子が、ほかの女と結婚するようなことにでもなったら、あくる朝、おまえさんの心臓は破裂して、おまえさんは海のあわになつてしまふんだよ。(141 p)

というほどの厳しい条件がつくのである。しかもそれは、人魚姫の責任ではなく、ただ王子の愛の自由性に賭けられている。ここには、相手に愛を強制することさえ許されない、母親人魚の持っていた愛の性質とは、真反対の性質が導き出されている。傲慢と強制ではなく、謙遜と自主である。

どれだけ、相手も自分も立派で真実であつても、人魚の母親がしたような「幸福に暮らされるだろう。」いや「暮らされないことはない。」という予測や断定を立てることは許されない。「永遠の生命」を獲得する動機となる愛は、実に無限の方向性を有している。つまり、無限の選択性が許されているのである。人魚姫が「永遠の生命」を得るチャ

ンスは、その中の一つであり、しかもそれは、相手の選択と自分の選択の一致にかかっている。可能性は、万に一つ、億に一つである。

ここにいたって、与えられているこの選択の自由性には、必然性と唯一性が要求されていることが解る。誰が止めても、愛さずにはいられない」と言う内発的な必然性である。そこには、父や母の勧言によって、容易に覆されるという脆弱さは無い。天にも地にもそれしかないという唯一性であり、必然性である。変化しようのない絶対性である。

アンデルセンの提示した愛のもつ自由性は、唯一性、必然性、絶対性、不変化を要求されており、かつ、各々の意志と理解に任されるという特性を持っている。

アンデルセンは、こういう愛にあって、人々が対峙している時、はじめて「永遠の生命」を得る可能性が開かれていると言う、可能性であって、保証されてはいない。しかしここに到らなければ、一切のものは泡であって、如何に躍動しようとも、生命とは言わない。つまりまだ存在を得ていない者、という自覚と謙遜の上に立つ愛が説かれているのである。

以上の思想は『聖書』から来ている。『人魚姫』の前身と言われている、フーケの『ウンディーネ』にその雛型が見られるし、又、王子と人魚の恋物語は、アンデルセン自身の悲恋に取材しているとも言われている。様々な原因があるが、思想的な根拠は大きく、この辺に由来しているようである。（後に明らかにしたい。）

ま と め

「北の海」から脱出するために、「捨て子」をした動機の背後には、「個」と「社会」の独自性・尊厳性・自由性・

統一性を願ひ、そのユートピア建設のために、愛を基盤にして乗り出して行こうとする未明の思想があつた。しかしその愛は、強迫性さえ及びており独断と偏狭に行くしかなく、やがては爆発すべき危険性と脆さを秘めている。それはこれ等がすべて有限なものに基盤を置いているからと言えようか。未明は、永遠を求めつつ有限をよりどころとし、アンデルセンは有限に死んで永遠をよりどころとしようとした。それは憧れと体験程の違いでもある。いずれにしても同じ愛という一語でありながらそこに秘める万語の深さと緻密さの違いによって、同じ題材と構成をもちながら洋の東西にきわだつ二つの作品が生まれて来た。人魚姫は、存在を得るために、母親は、自分の存在性を証詞し、具現化するために、人間の世界へと出て行くのである。

「愛」という一語に内在されることばの量と質は、作品の冒頭のことばを規定し、構成を規定し、内容の小さな部分すみずみに到るまで規定しつくしていた。ことばのもつ本質を見過しての作家作品研究は、注意しなければと思う。

『赤い蠟燭と人魚』の(起)の部、母親の捨て子の動機を中心にして、本作品に於ける愛の在り方をさぐってみた。

注

- (1) 菅 忠道『日本の児童文学Ⅰ総論』大月書店・昭42・5・450 p.
- (2) 同 26 p.
- (3) 古田足日『現代児童文学論』くろしお出版・昭34・11・10 p.
- (4) 同 9 p.
- (5) 同 11 p.
- (6) 同 9 p.
- (7)・(8) 猪熊葉子『日本の児童文学作家Ⅰ、「小川未明」明治書院・昭48・9・73 p.

(9) 畠山兆子『国語教育学研究誌』第2号、「小川未明『赤い蠟燭と人魚』の研究」大阪教育大学国語研究誌・昭52・48 p.

(10) 『夜の街にて』大正3・1『小川未明作品集全集』第5巻・249 p.

(11) 小川未明、感想創作集『生活の火』『草木の暗示』精華書院刊・大正11・179 p.

地上に生れて来た上は、地上の美を心から楽しむことの出来るやうな生活を営まなければならない。また、さうした生活をすべく努力しなければならない。春になれば春を樂み夏になれば夏を樂しむことの出来るやうな生活が本當の生活であるのです。

(12) 『生活の火』『現実生活の詩的調和』232—233 p.

人間が汗を流して暑い喘ぎを吹いている時に、其の背後の若葉には絹のやうな陽の光が流れ、足元の草には微妙な色彩が合奏している。若し烈しい労働のために頭の荒んだ人達が其等の光景を見たとしたらどうであらうか。彼等は必ずや現在の苦しみをも打ち忘れて美とそして或る愉快とを感じるに相違ない。而して其等は常に労働と云ふものに生命と力とを與へ、以て労働の意義と其れに伴ふ諸々の感情とをより鮮明ならしめているのである。……そして其處には又極端から極端に異なる處の力と力との調和せられたる合奏の天地がある。此の快よい調和を意識的に藝術に再現する時、これに對する吾人は永遠の若々しさと、喜ばしさと、限りなき幸福とを感じる事が出来る。(232—233 p.)

(13) 『生活の火』『田舎と人間』95 p.

ほんとうの藝術や、力強い思想と云ふものは、都會から生れるものではなくて、單調で神秘的な田舎から生れると云ふことを感じた。そこには自然に對して深く滲む情趣がある。沈黙の思索がある。そして、それを妨ぐる何ものもない。都會に在っては、餘りに靈魂の浸潤を著しく妨げる。

(14) 石井桃子他『子どもと文学』福音館・昭42・5・1。

(15)・(16)・(17) 猪熊葉子『日本の児童文学作家』I、「小川未明」明治書院・昭48・9・80 p.

Summary

A Study of *Red Candle and a Mermaid* by Mimei Ogawa

—The Mermaid Mother's Motives for Deserting Her Child—

Midori Ohkubo

In describing here the mermaid mother deserts her child out of love, a love tinged with compulsion, arbitrariness and obstinacy, Mimei Ogawa searches for a definition of the individual in relation to his society. She suggests a world where uniqueness, dignity and freedom are important. She emphasizes the need for unity—an inner unity of the individual as well as a unity joining individual with his society.